

日本保育学会において倉橋賞受賞

幼児期と旋律楽器

清水美代子



I 幼児期と音楽

幼児期の音楽が歌唱中心に扱われていた時代から、聞くこと、弾くこと、作ることへと幅を拡げつつあることは既に保育要領に示されて何年もたったこの頃、当然のことではあるが、子どもたちにとっては幸せなことである。幼児期は将来の人間形成の基となる時期として、いろいろの点で大切であるが、音楽教育には特に大切な時期であるといわれている。たしかに絶対音感や和音感が一番育つことと、その把握が大変確実である。もちろんこれは普通の状態ではむずかしく、何らかの形で音感の育つ方法を取ることが必要で、私の場合は歌いつつ弾くことでこれが随分急速に育ったと思われる。また幼児言葉がいえると、知らない間にふし

づけをして歌っていることはたびたびで、むしろ歌うという意識がなくて歌が言葉かと思えることがたびたびである。

II 幼児期の音楽教育の問題点

(1) 発声器の未発達と声域の狭さ。

幼児期は発声器が十分発達していない。そのため声域も狭く、その個人差も甚だしい。調査の仕方の不備はあるが、三九年度の学会発表の「幼児期の声域」によると、図①の声域にわたっている。そしてその音程が、短二度から一四度の広がりをもつものもいた。正しく歌えるものは一・四％で、一〇〇人中一・四人ということで余りにこの割合が低くて発表に迷ったが、この調査ではそう出た



図①

ので、曲は子どもの好きな曲を歌わせた。歌唱の場で声域の狭いことは音楽を学ぶ上では損失となり、正確な歌唱のできないことは正しい音程感をつける上にも、正しい絶体音感をつける上にも困ることである。

(2) ここではリズムは音符の長さに対する反応をさしているが、これを感じ取ることは音楽の基礎的要素である。幼児期には一拍、半拍のリズムが正しく把握できればいいと思うが、実際に使用されている音楽の音符のリズムはそうでなく、符点音符または相当複雑な要素をもつものがあることを思うと、それぞれの音符の長さに反応する力はこの程度でいいということではないと思う。しかしこれらのリズムの基礎になる一拍は曲によって時間が異なることもまたなかなか幼児期にはむずかしい問題で、指導者のよい指導が必要だと思う。打拍法のみによってこれを育てることは余りにも感覚的に過ぎるように思える。

(3) 音符は音楽のよりどころであるが、音楽指導者の中には既に幼児に把握させている人もある。しかし音符の判断は一分間に六〇から一〇〇または二〇〇近くの速さで判断を必要とし、それは音楽的な方法によって再現することが条件となる。だから普通の状態では誰が考えても全くむずかしいことである。しかし音楽の場では無視できないことである。

(4) 音符の問題では今一つ、線による指示法が幼児では取り上

げにくい問題点の一つである。

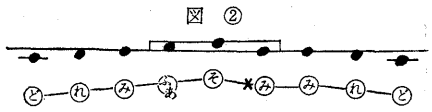
幼児は一線二線と数えていくことが不得意である。これは図形に対する反応を研究された愛知教育大の川口四郎氏の調査の中で、*形が幼児に把握しにくいとあったが、これに共通することでは形をつくる線が認識しにくい時代に平行線が読み取りにくいのは当然である。ただ線として受け取められているかと思われる。

(5) 諸外国では歌唱は宗教の中で歌われ、音楽的に育った年長者と歌う機会が多い。しかし日本ではこの場合は学校教育に移されて、歌は学校で歌うことになっている。そしてまたテレビやラジオがその一部を受け持つ時代になった。また一歩家庭を出ればどこかに音楽の聞こえる昨今である。これもまた無視できないことだと思われる。

Ⅲ 幼児期に使える理論的要素

(1) 高低感覚と長短感覚の把握が先ず音楽を身につける基礎的条件であると思われる。二拍子、三拍子、四拍子の拍子にふくまれる、強拍、弱拍の問題はこの時代に理解できることである。また高低感覚は声として出す以前に、音符の表示によって知らせることは可能である。線の理解ができないので、必要な線を加えることや斜線を使うことによって表示する。これは既に同じ方法で小学校の低学年で使用して指導している人があり、同じ考えの人

	A	どれ	み	どれ	み	そみれど	れみれ
表	B	ドレ	ミ	ドレ	ミ	ソミレド	レミレ
①	C	たた	たん	たた	たん	たた	たん



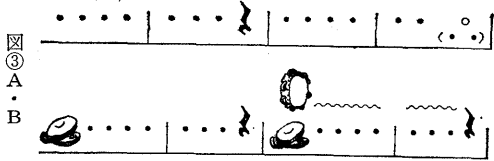
もあることを知った。図②のような表示である。

(2) 歌唱に階名を加えた。幼児が幼稚園に来る頃には既に音楽の言葉が「ドレミ」であることを知っているものは大変多い。(三八年度発表) しかもこれが高低を現わす言葉であるということも。一度覚えた歌を階名唱させることはむずかしいことでなくむしろ優越感をもつて歌うように思われる。しかもだんだんまちがいがなく歌えるようにもなる。ただこの際よく歌える歌を使うことと固定度を使う。(い)つでもハ長調よみにし必要な所に#やbをつける。

#やbのついた個所のみ方は約束でわかりやすく扱うことで、そのまま「ブァシャブ」とうたわせたりしている) また場合によっては文字で示すこともした。文字の読めない時代でも音と結びつけて七文字でもあるので間もなく覚える。

ひらがな(表①A)とかたかな(表①B)も使った。音は将来かたかなで表わすのでそれを考えて使う。

(3) リズムの歌も歌唱の中に加えた。これは小学校では音符の長さに(たん)とか(たた)とか使う。これははずみもあり、簡単な言葉であるので使うことを子どもたちは大変喜んだ。(表①C)



表②	メ	エ	リ	さん	の	ひ	つ	じ	メ	エ	メ	エ	ひ	つ	じ
	メ	エ	リ	さん	の	ひ	つ	じ	メ	エ	メ	エ	ひ	つ	じ

要は同じ歌でいろいろな歌い方をすること、しかもこんな簡単なことは、間もなく先生の指示なしに自分でできるといふこと、その喜びが大きいと思われた。

(4) リズム合奏の場合は楽譜に近い形でたまを使う方が便利であった。殊に休符は他のどんな指導によるよりも休符を書くことが一番効果があった。絵符を使ってもみたが、やや不明瞭になりやすく、たまを使う方がよいように思われた。

○——とまる(のばす) (のばすよりとまるという言葉の方がよく解った)

●——あるく(すすむ)

と——やすむ(手を開く、手をあげる)

二拍子、三拍子はたまの数で十分わかった。(図③A)

指揮法によるよりもよくわかり便利である。楽器を数種使う時は、段数を少なくして、なるべくわかるようにくふうするとよい。(図③B)

(5) 歌唱の場合のばすリズムは語尾ののばすことで正しく歌わせることができる。

同じかく時に長短を字の大ききで示しておく、長短の關係がよくわかる。(表②)

例えばこんな略符を使わないで、空間的に処理されて歌う場合二拍子が四拍子に扱われている場合が大変多い。拍子感をつける上でもこれは大切なことだと思ふ。リズムは特に幼い時から正しい積み重ねをもたないと、附点、休符、拍子などがあいまいになりやすい。

♪と♩との違いについても「たた」「たっか」のリズム唱や歌詞の与え方でこの時代から正しく指導することが結局は子どもたちが将来につながりをもつ学び取りをさせることになる。

IV ハーモニカ

(1) ハーモニカ指導の動機

幼児の歌唱のみに頼って音楽教育をすることは将来のための音楽教育や、リズムの把握には十分でないことがわかってから、先ず鍵盤楽器の使用を考えていったが、楽器の性格上全員に行なうことの困難なこと、家庭でも鍵盤楽器をもたないものがまだ相当あることから、ハーモニカの指導にむけた。また口で吹くことで音感が一番よく育つのでないかと思つたことも原因の一つである。

- (2) 使用上の問題点は使つていろいろわかつた。
- (A) 吸気による発音ができにくい。

これはできる子どもにとつては何でもないのにできない子どもにとつてはなかなかむずかしかつた。

(B) 高低の方向がのみこめない。

それはハーモニカの場合高低の方向と移動の方向が反対になることが原因で、口を移動させる場合は余りむずかしがらなかつた。

(C) ハーモニカの移動が大きすぎる。

吹く場合の移動が大きくなり易い。そのため必要な音が出ない。

(3) 指導の段階

(A) 吸気の練習

(イ) 封筒を使用してふくらませたり、すぼめたりする。

(ロ) 紙をつかつて前に吹いたり吸いよせたりする。

(ハ) ハーモニカを使つて吹いたり吸つたりする。

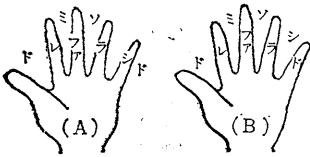
(ニ) ハーモニカは好きな所を吹いたり吸つたりさせ、曲に合わせて行なわせる。

(ホ) 移動の練習をさせる。

(ヘ) 指を使つて移動の方向をのみこませる。指の間を呼気に使用し、指を吸気に使う。(図④)

(ト) ハーモニカを一呼気で左へ移動させたり右へ移動させることで高音低音への移

図 ④



動方向を知らせる。

(C) 呼吸によるリズム奏

(イ) 十分音をだすことを曲に合わせてさせる。

(ロ) 高低の指示により高低をつけて音を出す。

(D) 呼吸吸器を併せてのリズム奏

(イ) 指揮による高低移動と呼吸吸器を使っての伴奏をオルガンやピアノの曲に併せて十分行なう。

(E) 二度の練習

(イ) 豆腐やさんごっこ

好きなところを吹いて吸って、どうふやさん^々の笛をまねる。

(ロ) 五度または六度の音階練習(ドレミファソ)

(イ) 二度の音程部分の曲の練習

どれみ—どれみ—(ちゅうりつぷ)

(F) 三度の練習

(イ) 曲を使った方が興味もてた。

ちようちよ—ソミミ—

ジングルベル — ミミミミ—ミミミミ—ミソドレ—ミミ—

(G) 同音(一度)の練習

(イ) ド——ファの同音を二回または四回づつ吹く練習

(ロ) スタッカート奏からだんだんレガートに

(H) レガートの練習

表 ③

↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑
レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑
レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

(イ) 一呼吸で ドミソドの練習

(ロ) 一吸気で レファラレの練習

(I) 曲の練習

(イ) 手の移動による指揮

・手によって呼吸吸器移動の方向を示す指揮法は幼児には時間的の判断が伴わない。

・手の移動の指揮についてこられる頃には既に吹いていた。

(J) 略符による指示法を初めて練習する場合は使って各自で練習させた。(表③) ができる頃(長くかからない)になる

と大体自分で吹くので、できない子どもや、部分的にできない所の個人指導もできるので全員の個人的なみづめもてた。

(K) この段階から、自分の知っている曲を吹こうとする子どもがふえて来た。階名唱もなしに吹いたりする子どももできた。

ここで初めて、自分がしっかり把握した曲は別に、呼吸吸器を考えることなく、吹くことに気がついたのであった。したがって、順列ハーモニカと標準音列のハーモニカと、何の心配もなく吹いていくことが解り、ハーモニカは何をつかってもいいということになった。しかし音程の広い曲はむしろ標準型の方が

取扱いやすいのではないかと思う。

(4) 個人指導を要する子どもの傾向

受け取りの遅い子どもや、興味は持っても続かない子どもといろいろのケースがあるのでまとめてみた。

- (A) 演奏になると吸気がうまくない。
- (B) 歌唱が不得手で本人の音感が育っていない。
- (C) 短い時間の反応が鈍いため、方向などの判断ができない。
- (D) こんな子どもはゆっくりすることでできるようになった。
- (E) 人ばかりが気になるのでなかなか落ち着かない子ども。
- (F) 活動的で特に落ちついて繰り返し練習できない。
- (G) 無頓着で出来ないことが気にならない。
- (5) ハーモニカの指導をする場合の留意点
 - (A) ハーモニカの意を十分出す喜びや、その音に対する魅力を感じさせること。
 - (B) リズム奏の段階を重視し、自分で好きなように高音部を吹かすこと。
 - (C) ハーモニカのでき、不できを気にする前に、歌唱の段階でしっかりと把握させること。
 - (D) 呼吸吸気のむずかしいのは初期段階であるので、その抵抗がなくなるまで一つの曲を吹かすこと。
 - (E) 吹けるようになると、自分で次々知っている歌を吹こうと

する。その段階に至ったかどうかをよく見定めること。

- (F) 簡単なフレーズなど指導すると、曲に美しさができのどで、その意義がわかる程度にしたいものと思う。その意味がわかると自分で気にして吹くようになり、技術的に特に立派ではないが、その意図が聞きとれるように吹くものである。
- (G) 正しい音楽上の約束や、書き方はおとなの憶測でくずしたり、形をかえるより、素直に受け取り易い方法を配慮して、正しく与えていく方がよい。音楽は感覚的な受け留め方が多いので、割合と楽に理解されることが多い。
- (H) 特に口に当てるものであるので清潔に対する注意をはらい、清潔なガーゼで使用前後はいいねいに扱うこと。

V オルガンおよび鍵盤ハーモニカの指導

オルガンの指導に入ったのは三九年度、園外で個人指導をうける人数が余りが多くなったので、受けない子どももひけるようになるための指導であった。その他興味もてる程度を知ることや、音感を高めることなどのねらいをもって、十回、十月から十二月まで行なった。行事その他の関係でこの年はこれが精一杯のことだった。

(1) 指導の方法

- (A) 指遊びの形で指の訓練をする。

ドレミー	ドレミー	ソミレド	レミレー
1 2 3	1 2 3	5 4 2 1	2 3 2
ドレミー	ドレミー	ソミレド	レミレー
5 4 3	5 4 3	1 3 4 5	4 3 2



- ⑤ ル、日の丸、きらきら星をはり、左手と右の両手弾きのできるものに五度の和音をつける指導をした。
- (F) 四十年度は希望者に鍵板ハーモニカを持たせた。バスの待ち時間をその練習にあて、個人指導をした。木琴、鉄琴もひかせた。友だち同士教えたり教えられたりのグループ活動だった。(三〇%)
- (I) 鍵板ハーモニカは片手だけしか弾けないので、男の子はかえって弾き易かった。

- (H) 指を折ること。(こんにちわ遊び)
- (H) 両手向かい合わせて反対の手の指をおさえる。(うたにに合わせて)
- (G) 机や反対の指の上などをうたに合わせて指の名をいいながらおさえる。
- (B) 鍵板をかく練習
- オルガンの折り紙にかいたりする。
- (C) グループをつくり、グループの既習者を先生として練習をすすめる。できないものの指導を主として進める。
- (D) オルガンに略符と指使いをかいてはって好きなのを弾けるようにした。(図⑤)
- (E) 五度音階、チュウリップ、ジングルベル

- (H) 鍵板ハーモニカと、オルガンは同じだからすぐ移行できるかと思ったらそうはいかなかった。幼い中はいろいろ経験させる必要があるとつくづく思った。
- (G) この年は園外で指導を受けるものはほとんどなく、親たちも鍵板楽器のひけるようになったことを喜んだ。
- (G) 四十一年度は四月のはじめから、ハーモニカおよび鍵板ハーモニカの希望購入した。約七〇%が購入した後、九月には全員が買ったのでハーモニカと同様に、全員の指導をした。卒園前には、ハーモニカよりも、鍵板ハーモニカの方が複雑な曲を正確に弾けるようになった。
- (2) 鍵板ハーモニカを使用して
- (A) 鍵板ハーモニカは吹き口の購入によって全員が使用できるので備品としておくことができる。
- (B) 吹くだけであるので幼児にはよいが唾液が入り易いのでその処理を正しくする必要がある。
- (C) 扱い方をていねいにしないと破損しやすいので、取扱いに注意を要する。
- (D) 園児にはやや重い感があるが、机に一端をかけるなどくふうをすればよい。
- VI ハーモニカおよび鍵板ハーモニカ、オルガンなどの指導結果

表⑥ ハーモニカ

曲名	A	B	C
チュウリップ	15	15	4
子供のマーチ	2	3	3
	1	1	0

(1) 三十九年度オルガン指導結果(表⑤)
 人員 五四名
 期日 十月より十二月まで、十回指導
 A—速度は自由で指使いおよび曲は大体正しい。
 B—曲や指使い、ときどき間違え。
 C—指が思うようにならないが部分的に弾ける。
 D—まだわからない。

(2) 三十九年度ハーモニカ指導結果(表⑥)
 期日 一月より三月まで十回指導

A—速度自由で音程リズム正しい。
 B—方法はよくわかるが時々間違え。
 C—方法がよくわからず時々吸気呼吸反対になったり高低間違える。

表⑤ 39年度オルガン指導結果

		A		B		C		D (その他)	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
五度音階	片手	50	92	3	6	1	2	0	
	両手	40	79	9	17	5	9	0	
チュウリップ	片手	45	82	8	16	1	2		
	両手	28	52	4	7	10	19	12	22
ちょうちょ	片手	15	28	23	43	6	11	10	18
	両手	13	24	25	47	6	11	10	18

表⑦ ハーモニカ年中組

A	人員	割合
大体ふける	4名	14%
上行下行わかる	6名	21%
上行のみできる	4名	14%
呼気吸気のみ	6名	21%
呼気のみできる	8名	30%

人員 六四名
 曲—自由選曲
 A—自由の速度で間違えない。
 B—時々間違える(曲の把握不十分)
 (イ) ハーモニカ(表⑧)
 (ロ) 鍵盤ハーモニカ(表⑨)
 (市邨短期大学)

表⑧

曲名	A	B
チュウリップ	13	3
ちょうちょ	8	
こぎつね	8	
かっこう	11	
元気な子供	5	
蛍の光	6	2
たき火	2	
春が来た	2	2
聖者の行進	1	1
計	56	8
百分率	87%	13%

曲名	A	B
ちょうちょ	5	6
チュウリップ	6	6
元気な子供	6	6
こぎつね	14	2
蛍の光	5	2
かっこう	5	
夕やけ	1	
計	42	22
百分率	66%	34%

(3) 四十一年度年中組指導結果
 調査人員 二八名 ハーモニカ指導期間 十月—二月 二十回
 但し一回の時間五分—十分
 曲—ちゅうりつぷ(表⑦)
 (4) 四十一年度年長組